

## 令和元年度 山梨県南都留地域教育フォーラム提案書

第6分科会（特別支援教育部会）

富士河口湖町立河口湖北中学校

教諭 小林 和夫

### ふじざくら支援学校との交流を生かす指導 ～共に社会を生きる感覚を養うために～

#### 1 はじめに

ふじざくら支援学校との交流は2年生の大切な行事のひとつとなっている。これまで積み重ねてきた年数を考えると河口湖北中学校としての“特色”と言ってもいい。この特色ある行事を生かし、「生徒にとって“有意義”で、またとない“体験”をさせていきたい」と考えたことがこの取り組みの始まりである。また、地域の方を講話の講師として招いたり、福祉協議会との連携を考えたりし、北中の“地域としての資産”を生かした取り組みとしていきたいと考え、学習を充実させていきたい。

#### 2 ふじざくら支援学校との交流を通して北中に蓄積された力

##### ○ ふじざくら支援学校との交流の歴史

- ・23年間の積み重ねと大切にされてきたもの（福祉教育、交流を通して重ねてきた文化）

##### ○ 交流のノウハウの蓄積

- ・定番化された交流の内容（レクの内容・合唱など）⇒安心して交流できる
- ・取り組み期間の短縮化と効率化（定番化した内容とその年度ごとの交流の意義を考えての取り組み）

##### ○ 総合や学活などの年間活動計画に組み込まれた行事である。

- ・生徒、保護者、職員の共通理解のもとで取り組みができる（計画的な取り組み）。

#### 3 生徒の現状と「福祉社会」と「教育」を考える

##### (1) 生徒の現状

現在の北中は全校生徒76名、各学年24～28名の単級で構成されている。小学生の頃から福祉講話を聞く機会を持っていたこともあり、“福祉”への知識が豊富な生徒が多い。北中生の特徴として優しく、相手を思いやることができることがあげられる。体調を崩したり、ケガをしたりなどで介助が必要な生徒を進んで支援する姿もよく見かける。素晴らしいのは相手の立場を理解し、支えようとする姿勢が見られることである。これまでのふじざくら支援学校との交流でもこうした優しい一面が生きていると感じられることがたくさん見られ、交流をより有意義なものとしてきた。

その一方で生徒が置かれる社会はさまざまな障害があり、さらに困難な状況も予想される。また、場合によっては生徒自身も自分の生きにくさに気づく場面が生まれるかもしれない。今回の学習は“ふじざくら支援学校との交流”を活用して“障害”について考え、より理解を深め、共に支え合っていこうとする姿勢を育むことが必要だと考えたことを原点としている。

##### (2) ふじざくら支援学校との交流を通して考えたいキーワード

《生徒が生きていく社会に必要な考え方として》

- “障害”という言葉があふれる社会 ⇒ 《キーワード》 **共生** そして **自立**
- “互いに支え合うこと”が必要な社会

#### 4 3年間を見通した取り組み

##### (1) 取り組みを考える上での考え方として

- 2年時の“ふじざくら支援学校との交流”を中心として、3年間を見通した取り組みとして考える。

- 福祉講話や体験活動を取り入れ、生徒が福祉についてさまざまな方向（視点）から考えるようにしたい。
- (2) 3年間の取り組みの主な内容
  - ① 1年時；福祉への関心と理解を高める
    - さまざまな“障害”を知る
    - 障害者の方の話から、“障害”の実態を知る
  - ② 2年時；交流を通して、“共生”を考える
    - 支援学校と交流をはかる
    - 交流の際に“障害の実際”を感じる活動を行う
  - ③ 3年時；障害者の方の生き方から考える
    - 福祉講話を聞き、自分の周りの社会と自分自身の生き方の関係について、自分の考えをまとめる。

## 5 実際の取り組み

### (1) 1年時～福祉への関心と理解を高める

#### ①目的

- さまざまな障害があることを学び、障害を持っている方の講話を聞き、“障害を持った方の生き方”から、自分の生き方を考える。
- 障害がある人と共に生きる上で気をつけることや社会のしくみ（バリアフリー）や課題について考える。

#### ② 取り組み

##### ア) 山梨県福祉施策

心のバリアフリーを進めよう！  
 広げよう！ を見て障害について知る。



#### 《 生徒の感想 》

もし、自分が障害者の立場に立ったときにまわりの人が助けてくれる社会になれば良いと思いました。手話を覚えたいと思いました。また、外国の人たちに英語で話している動画を見て、私も全く英語がわからないわけではないし、外国人に声をかけられることがあるので、相手がわかりやすいように簡単な英語を覚え、使ってみたいと思いました。

私はこんなにたくさん障害があるとは思いませんでした。特に私は肢体不自由の人に釘付けになりました。私のおじいちゃんは脳梗塞が何かで倒れて肢体不自由になってしまいました。私にできることはしているけれどこんなに大変だとは思いませんでした。他にもいろいろな障害を持っている人がたくさんいて、大変な思いをしていることにとっても悲しいと思いました。私のおじいちゃんや町で不自由な人を見かけたら、優しく声をかけ、困っていることを聞き、手助けをしていきたいと思いました。そして、このような不自由な人たちも安心して楽しく過ごせるような社会や学校をめざしていきたいと思いました。

イ) 福祉講話；小林 俊介さん

～ 障害を持った方と共に生きる ～

- 講師の方の生き方から考える。
- 車椅子生活から実感した“バリアフリー”



車椅子を配慮しているが利用は片方に限られる



車の両サイドでの利用が考慮されている

《 講話で気がついたこと・印象に残ったこと 》

- ・相手の人の気持ちになって行動する。
- ・障害者のためにももの（手すりやスロープなどの施設・・・）をつくるときはいろいろな障害者のことを考える。
- ・中学校の時にクラスや学年のみんなが差別することなく、（俊介さんが頑張ろうとしていることに）協力してくれた。
- ・困っている人がいたら、躊躇なく手伝ってあげる。

《 講話で感じたこと 》

小林さんの話を聞いて障害者の人の接し方に気をつけようと思いました。まわりの人にはわからなくてもその人なりの障害や苦しみがあることがわかりました。これからは手伝って欲しい人がいたら進んで声をかけ、少しでもその人のためになるようなことをしていきたいと思いました。

(2) 2年時～交流を通して、“共生”を考える

① 目的

[ 第1回交流会目的 ]

- ・交流を通して“共生”の意識を持てるようにする。
- ・交流を通しての関わり合いを通して、同じ場でともに学ぼうとする姿勢を育む。また、個々に応じた対応ができるような考えを身につけさせる。
- ・事前学習や事後学習を含めた交流活動を通して、互いに理解し合おうとする。

[ 第2回交流会目的 ]

- ・地域に住む同年代の生徒との交流を通して、よりよい活動をつくろうとする姿勢を育む。
- ・ふじざくら支援学校の生徒の迎えや送りをサポートすることでこれまで学んできたことの実践を通してバリアフリーについて考える。

② 取り組み

ア) 第1回ふじざくら交流会

- ・福祉講話；ふじざくら支援学校と児童生徒が抱える“障害”について…小林雅美先生（ふじざくら支援学校）

- ・交流の準備；自己紹介カードの作成、紹介ビデオの作成
- ・当日の交流；ペア探し、サイコロトーク、フープリレー、写真撮影

#### イ) 第2回ふじざくら交流会

- ・ふじざくら支援学校の生徒の出迎えと支援
- ・ソーラン節、ソーラン節合同練習会、合同発表会
- ・合同合唱；「マイバラード」
- ・ボッチャ

#### ウ) 文化交流会

- ・ふじざくら支援学校の生徒が製作した作品を校内に掲示する。
- ・北中の生徒の作品（習字）をふじざくら支援学校の文化祭に展示する。



僕はふじざくら支援学校との交流は楽しかった。いろいろな人と話をした。僕の知っているアニメでけっこう話ができたことも楽しかった。フープリレーでは僕のペアになった人がすごく元気だったので僕も元気になることができた。この交流で感じたことは障害を持った人は苦手なことがあるだけだと思った。僕にも苦手なことがある。これからは苦手なことや困っていることを助け合っていくことが大切だと思った。

今回の交流を通して障害はその人の一つの特徴だということがわかった。僕のペアになった人はしゃべるのは苦手そうだったが、絵を描くのはとても上手だ。サイコロトークでは進めるのは僕たちだったがふじざくらの人たちも一緒に楽しく過ごすことができた。フラフープリレーでは勝ったときも一緒に喜べ合えたし、作戦会議の時も楽しく話し合い自分たちの走順を決められていて楽しかった。自由時間の交流もとても楽しく、お互いの距離感が縮まったと思った。自分も自分の苦手なものに向かい合い、自分自身の特徴を受け入れていきたいと思う。これからも障害者に会う機会はあると思う。今日、感じたことを生かしていきたいと思った。

#### 6 まとめとして

今回の学習や取り組みを通して生徒はたくさんの笑顔や真剣な表情を見せた。あるときは“たくましさ”を感じ、“力強さ”を感じた。それは一人一人の生徒が相手の立場に立って一生懸命に行動したことに他ならないと思う。多くの人と接する中で「なるほど・・・」と思うことに気づかされ、社会の課題もたくさんの人の思いやりや優しさが原動力となって克服してきたのだと改めて感じさせられた。“障害”を克服し、乗り越えていく原動力のひとつを垣間見たような気がした。

今回の学習は3年生になるまで続いていくものである。障害を乗り越えていくために必要な力や考え方について、今後も探求を深めていきたいと思う。